

---

# 一人一人の未来

spas12K

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一人一人の未来

### 【Nコード】

N1441Z

### 【作者名】

spas12k

### 【あらすじ】

空に身を委ねる鳥と、大地に身を宿す獣。

それぞれが手に入れたのは「能力」ちから

黒い羽根に宿された力を求め、欲望の姿が現れる。

戦うための道具、守るための道具。

相反する作られた「物」が今動き出す。

逃げる少女と、出会う少年の物語。

## コウモリの居場所（前書き）

初めての投稿です。

悪い点があればどんどん送ってください。

## コウモリの居場所

夜の十一時を超えたころ、廃墟と化した工場に散発的な明かりが灯る。

静寂を破るように乾いた爆発音が休み無く轟く。

二人の男女が死力を尽くし、ひたすらに走っている。

男は背が高くやや老けた顔に白が混じったひげが顔を覆っている。

背中には大きな傷があり、流れ出る血が地面に跡を作っている。

もう一人は小さな少女、病院から出てきたのか、研究所から出てきたのか。

詳細は分からないが、変わった服装に黒い外套を羽織っている。

「ルウ、この先は……一人で行け。俺と一緒にでは……いずれ捕まる。

お前だけは……捕まるわけにはいかない」

「おじさんはどうするんですか？」

苦痛の混じった声で少女を逃がそうとする男。

別れることに不安を抱く少女が、相手の身を案ずるように尋ねる。

「大丈夫だ……それよりも、とにかく逃げる。あいつらは俺が引き止める」

「でも……」

「行け!!」

なおも食い下がる少女を男は強引に突き放す。

「おじさん……」

「死なないでくれ……ルウ」

開けて闇夜でも目につきそうな道に走り去っていく。

真逆の方向に人目の無さそうな小道を少女は逃げる。

## 初めて見える世界（前書き）

塾帰りに傷ついた男性と出会った主人公。

助けて欲しい人がいる、力添えを求める男に戸惑う少年。

そして動き始めた戦いの歯車が回りだしたことを知ることになる。

## 初めて見える世界

等間隔で並ぶ自販機の明かりの前を、教科書の入った鞆を背負って歩く。

右手には夜食に食べるプリンが握られている。

平和な日本でも、受験や就職と他人との争いは学生の悩み種だ。角を曲がるうとした時に、何かに吹き飛ばされる。

「痛っ」

後頭部を舗装された道路に直ぶつけ、焦点が合わなくなる。

よるめきながら立ち上がると、誰かに腕を引っ張られていく。

衝撃で通常の判断力が失われていたせいかわ、抵抗することができなかった。

ぼやける目に映ったのは深い溝が刻まれた顔と背中 of 大きな傷。鼻に血の匂いが漂ってくる。

いつの間にか公園の茂みに隠れていた。

正常な機能を取り戻した頭は意外なほどすつきりしていた。

ふと右を向くと木を背にして男が倒れていた。

「おじさん、大丈夫ですか!？」

傷だらけの体に憔悴しきった顔。

声をかけずにはいられなかった。

「今救急車を呼ぶので安静にしてください」

ポケットから携帯を取り出し、番号を押していく。

その携帯が閉じられる。

「どのみち助からん……それよりも、娘を……私の大切な娘を……助けてはくれないか？」

その男性の風体はどう見ても襲われたとしか言えない。

「娘さんも誰かに追われているのですか？」

「察しがいいな……そういうことだ」

「私に娘さんを助けると？」

「もう……頼める人はいない……頼む！！」

肩を強くつかまれる、その力は切に助けを求める気持ちが入められていた。

断れない。

「私でよければ」

「ありがとう……」

感謝の言葉を男はいきなり腕に注射の針を刺した。

「何ですか！？」

「力がなければ……戦えない……君には辛い未来が来るはずだ……すまない」

意味深な言葉を残して、最後の力を振り絞って立ち上がる。

「後は導いてくれる……君は安全になるまで隠れていてくれ」

そういつて、公園の中央　とても人目の付くところに出る

次の瞬間、彼の体を真っ直ぐな光線が貫いていた。

「えっ

体に戦慄が走る、恐怖が心を鷲掴みにする。

そこに、白い翼を持った　天使　と呼ぶに相応しい存在が現れる。

地面に降り立ったソレは、剣を振り下し、男の首を撥ねた。

男の死を確認すると剣をおさめあたりを見渡す。

茂みに隠れていなければ見つかったかもしれない。

二つになった体を両手に持ち上げて、ソレはどこかへ飛び去って行った。

過ぎ去った恐怖に安堵を覚えたとき、体の力が抜けてその場に倒れる。

最後に感じたのは、口に入った土の味だった。

## プログラム

誰かの呼ぶ声がして目が覚める。

（ここは？）

ぼんやりとした視界が鮮明になり、自分の状況が把握できるようになった。

「ガラスの中？」

気が付くとカプセルの中に入っていた。

それだけでなかった。

頭や首、足や手に病院の検査で使うような機械が取り付けられている。

『目が覚めましたか？』

頭の中から声がする。

「誰？」

あたりを見渡しても人影はいない。

狭い部屋の中、等身大のカプセルと周りを囲む機械だけだ。

『私は貴殿の力となりうるものです』

「俺の？」

『仔細は後で説明します。システムのインストールを開始します』

機械の合成音声、その言葉を合図にか周りの機材が動き出す。

頭のメットからゴーグルが現れ視界を遮ぎった。

急に頭が真っ白になる。

「……………」

何も考えず、呆けてしまう。

『身体異常は皆無。脳機能正常。起動承認。』

メインサーバとの接続完了。

サブサーバとの接続完了。

各機器の電圧正常を確認。



プログラムA系統からD系統まで解凍開始。  
解凍完了。

システムのダウンロード開始』

不思議な言葉の羅列を並べ、周囲の機械が動き始める。  
「ゴールのせいでは何が起こっているのかわからない。」

『システム1をダウンロード完了

システム2をダウンロード完了

システム3をダウンロード完了

システム4をダウンロード開始……』

順調に作業が進む中、遠くで何かが発火する音がする。

『システムエラー。外部より襲撃者を確認。

電源施設に深刻な損傷、システムのダウンロードは続行不能と判断。

システム5以降はダウンロード中止。

システム2・3・4を圧縮凍結。

システム1をインストール準備状態で固定』

カプセルが開き手足の器具が解除される。

頭のぼんやりした感じもなくなり、体も自分の思うとおりに動く。

『ミスタ、敵が迫っています。安全地帯へ誘導します』

「敵が来ているの？」

『肯定』

「あれ？ さつき力をどうとか言ってた？」

『システムのインストールをしていません。』

システムの使用には初期起動が必要。

現在勝算はありません、避難を推奨します』

頭の中の声を聴いている間に、幾度もの轟音が鳴り響きそれが近づいているのが肌で感じられた。

直感的に危険が迫っているのを感じる。

「逃げ道を教えて」

『了解。部屋を出て直進、突き当りを右へ。』

階段を上がり一階へ』

誘導する声に従い施設の中を進む。

見たことのない建物だが、誘導は正確だった。

『警告。六時方向より正体不明の敵が接近中』

「えっ、うそでしょ!？」

直後に真後ろで何かが爆発する。

振り返ると燃え盛る帆の背景に人影が一つ現れた。

ゆっくりとこちらに歩み寄ってくる。

『ミスタ、回避を。三時方向の道を進んで外へ出てください』  
言われた方向に全力で駆け出す。

外へ繋がると思いき大きな鉄製の扉を見つける。

『その扉から外へ』

外に出るといくつかの施設が現れた。

『30m先の倉庫に車両があります』

あそこまで行けば助かる。

そう思ったとき、壁を破壊して再び襲撃者が目の前に現れた。

S t a n d b y ……

燃え上がる炎を背景に迫ってくる男。  
後ずさるうとして石につまづく。

「動くな」

低い声で男が告げる。

動けば殺される、黙って男の指示に従う。

しばらく様子をうかがった男は、不審そつに尋ねてくる。

「お前、名前は？」

「……小野原 康馬……です」

「コーマか、何故こんな処に居る？」

「知らない、俺も知らないんだよ！ 気が付いたらここに居たんだよ！」

恐怖に声が荒げる。

何か気が障れば男は自分を殺すかもしれない。

しかし、そんな気持ちを抱くコーマとは真逆に男は溜め息をつく。

「被験体の子か？ 関係ない奴なのかあ。」

どつちやに白面倒なのは確かそうだが……」

厄介事を抱え込んだように男は面倒くさがる。

男の手に持つ棒が崩れて土に還る。

「ああ何だ」

男が口を開きかけた時上から人影が現れ、男の隣に着地する。

遅れて赤く長い髪が風を受けながら下りてくる。

「ああ、リズベス。施設は潰したか？」

「主要な物は大体。これで博士の計画は阻止した」

「やる事は終わったか」

「そう……だが、アルフェルドところでコイツ誰？」

コーマを指さして赤髪の女性が首をかしげる。

「被験体の子だと思うのだが、何も知らんらしい」

面白くなさそうに、アルフェルドと呼ばれた男は説明する。

「ふーん、でもあたい等の姿は見られたんだよなあ」

「いやまあ、確かにそうなんだが」

「殺るか？」

右手を持ち上げるリズベスと呼ばれる女性。

その手に大きな火の玉が出来上がる。

「待て待て、人間相手にそこまで大げさにするな。」

それに、この少年を殺しても意味はないし面倒だろう」  
慌てて男が止めに入る。

「そうなんだよなあ、後心地悪いしできれば殺りたくないな」

そう言つて女も手を振つて火の玉を消す。

『ミスタ、敵二人はあなたに対して殺意は無いようです。』

このまま相手の動向を窺うことを推奨します』  
その助言通り黙つて相手が帰るなり自分を解放するまで待つことにする。

ふとそこで気が付く、目の前の女性は降下してきた。

しかし、飛び降りることができそうな場所は背後の建物の屋上。

高さは数十メートルある。

それに先ほどの火の玉、男が手に持っていた棒状の土。

もしかして……

実在しないはずの存在が考え至ろうとした時だった。

猛烈な速さで何かがアルフェルドを襲った。

## 起動

「何だっ!!」

咄嗟の襲撃にも機敏に反応して防御するアルフェルド。

リズベスも応戦体制に移る。

「アルフェルド、その少年を非難させろ。」

あたいが相手する!」

「はいよ」

短い受け答えで役割分担が決まる。

リズベスは襲いかかってきた人に火の玉を盛大に放つ。

目に映った人影は、背に黒い飛膜のある羽根、手にはやや大きめの曲がったナイフを持っていた。

その姿を捉えたのも束の間、すぐに体が持ち上がる。

「え? うわっ!?!」

「おっと、暴れないでくれよ。あんまり男を抱き上げるのは趣味じゃないからな」

つまらなさそうに男はぼやく。

普通の人では考えられない速さでその場を離れる。

設備は山の中に建てられたらしく、周りを木が囲んでいた。

その森の中、アルフェルドはそこで康馬を下した。

「ちよいとそこで隠れてるか、帰ってくれると助かるね」

そう言ってもと来た道を戻っていく。

リズベスに加勢するつもりなのだろう。

「一体全体どうなってるんだ?」

立て続けに起きる騒動に頭の処理が追いつかない。

『ミスタ、先ほど現れた少女の護衛を開発者は私に設定しています。対抗手段を起動するまでの間、彼女に加勢を』

先ほどの人影は女の子だったらしい。

「その少女を助ける?」

『肯定。私には彼らに対抗する機能があります  
現在その機能をインストールできていませんその時間を稼いでくだ  
さい』

「彼らって最初に現れた二人？」

『肯定。最後に現れた少女を守ってください』

「ちよつと待って、戦う力は俺に無いはずじゃ」

『肯定。今の彼女では二人を相手にするのは不可能です。

一人の注意だけでも逸らしてください』

「素手ですか？」

『お願いします。彼女を守ってください』

悩んでいた時、建物があつた方向から鼓膜を震わす大きな音がした。  
振り返ると数メートルはありそうな火柱が立ち上がっていた。

ふと自分も彼等に殺されそうになった事を思い出す。

そして、自分に助けを求めた男性の顔を思い出す。

「わかった、時間を稼ぐよ。君もできるだけ早くその、機能を立ち  
上げて」

『感謝します。』

システム1インストール開始。

基本戦闘システム設定開始

情報統制システム設定開始

……』

機械の声は作業に取り掛かった。

近くに落ちていた手頃な大きさの石を拾う。

そして、逃げてきた方向を走って戻る。

飛び回る黒羽根の少女が二人に襲われていた。

逃げる少女の動きは捉え難いのか二人とも非常に集中していた。

ある程度の距離まで近づいてもこちらには気が付かない。

持っていた石をアルフェルドと呼ばれていた男の後頭部に向かって  
投げつける。

「ぐっ！！」

至近距離から投げたので相当の衝撃のはず。

「やったか？」

男が倒れたのを見て気絶していると思った。

「あと一人だけか」

そう安心したのは束の間だった。

うなりながらもアルフェルドは立ち上がったのだ。

「あいたた、ってお前かぁ。そりゃこの施設に居たんだから無関係  
って訳なかったか」

「うわ、丈夫な奴だな」

「そりゃこんくらいでくたばるかよ」

後頭部を摩りつつ大きく息を吐くアルフェルドが口を開く。

「それより覚悟はできてるよな？」

手を握り締めて男が殴りかかってくる。

（素手なら何とか……）

一瞬でもそう考えて殴り合いに持ち込もうとしたのを後悔する。  
体格は自分と変わらない。

だが、放たれた掌はとても重く鋭く、壁まで吹き飛ばされた。  
衝撃に腹を抱えてうずくまる。

昼に食べた物が喉まで出かかった。

「じっとしていれば、楽に殺してやる」

そういった男の手に土が集まって何かを形作る。

次の瞬間、騎兵が持つ円錐状の槍を男は握っていた。

「何故おまえは戻ってきた？ あの少女の仲間なのか？」

近づきつつ問いかけてくる男、余裕満々だ。

「お前からこそ何であの少女を襲ってる？」

地面に転がっていた鉄パイプを持ち上げて構える。

「命令があつてな、それだけだ。お前は どうしてだ？」

「ある人に頼まれた」

パイプを握る手に力を込める。

「頼み？ 命令ではなく？」

「そつだよ！」

その人は自分が死にそうなのにもかかわらず少女を助けてくれと俺に言つたんだ。

その言葉はとても強かつた、命令なんかより！」

男は呆れたように首を振る。

その一瞬の余裕を見せた相手に力の限り鉄パイプで殴りつける。左手で軽く掴まれたしまつた。

今度は蹴りが繰り出され再び壁に打ち付けられる。

「人それぞれ信じる物があるとは思つが……死んでもらう」

男は真つ直ぐに手の槍を振り下した。

『初期設定完了。 <ATD-X>起動』

殺されると思つたその瞬間に何か起きた。

目の前に迫つていた槍はその集合を解かれる。

崩れ落ちて元の土に戻る。

「何だ!!!」

男が驚いて後ろに飛び退く。

『ミスタ、 <ATD-X>起動確認。 反撃開始です』

低い機械の音がそう告げた。



## 先進技術

『ミスタ、全機能正常。戦闘の続行を』

自分の周りを不思議なものが包んでいるのが感じられる。

「なんだ？ それが博士の開発した力か？」

言いつつ男は拳を固める。

「尚更生かしておけなくなった」

相手の目が鋭く細められる。

負けじと両の拳を顔の前まで上げて格闘姿勢を取る。

「素人相手に手加減しねえぞ」

一気に距離を詰められる。

素早い右ストレート、寸でのところでそれを回避する。

続けざまに繰り出される左ジャブ、右の回し蹴り。

硬軟を合わせた打撃技に圧倒される。

「能力が封じられても、普通にお前くらいなら倒せるんだよ」

「そもそも何で俺やあの少女を狙う!？」

相手の気を逸らすために咄嗟に出た言葉だった。

「さつき言った通り命令だからだ!」

相手の猛攻は止まらない。

「何でその命令が下された？」

「そんなもの知るか!」

「理由も知らないのに襲うのか？」

「上からの命令は絶対だ」

「じゃあ俺がお前に殺される理由は？」

「そもそも、あるか!」

頭の片隅で何かが切れる音が聞こえた。

「そんなんで良いのかよ!？ この操り人形が!」

「何だと」

相手に一瞬だけ隙ができる。

「喰らえええ！」

怒りと憎しみを込めて相手の顔面を思い切り殴り飛ばす。

相手の頬骨が砕けるのを感じた。

アルフェルドは壁に背中を打ち付けた後ピクリとも動かなくなる。

「あれ、何でこんなに威力が？」

『ミスタ、あなたが博士に打たれた注射の中には筋肉を改良する物質が含まれていました』

機械の声は何ともなさげに告げた。

「本当か？」

『肯定。追加の情報として、私には頭で念じて頂いても会話が可能です』

「そうか」

ここまで来ると起こること見ることは何でも信じたほうが良さそう  
だ。

『尚、幾つかの機能と性能は初期設定が不完全で使えません』

（不完全ってことか？）

『肯定』

（なぜ不完全？）

『インストール中の襲撃によりシステム5以降の転送失敗。』

外部機器との接続がない状態での凍結圧縮によりシステム1以外は  
解凍不能。

以上の点より、現在当機の稼働はシステム1だけとなります』

（なるほど）

『もう片方の敵との交戦を』

（ああ、分かった）

そう答えて、もう一人の相手を探してす。

そいつは簡単に見つかった。

真後ろに居た。

「しまった！！」

身を翻してかわそうとするが距離が近い。

重い一撃を予想して身を強張らせる。

康馬を無視し赤髪の女性は倒れた男を肩に担ぎ、どこかに飛び去った。

それを追うことは不可能。

その後ろ姿を見届けていると、何か倒れる音がして振り返る。

舗装された土<sup>どれきせい</sup>瀝青の上に何者かが横たわっていた。

黒い羽根を持つ小さな少女だった。

## 先進技術（後書き）

なにぶん初めて書くので至らない点が多いと思います。

ですので皆様方からのアドバイスと感想を切に欲しいと思っております。

ご愛読、まことに感謝しております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1441z/>

---

一人一人の未来

2011年12月11日21時49分発行